

écrit par 14 historiens européens  
Histoire de l'Europe

Une initiative européenne de  
Frédéric Delouche

Shosaburo Kimura  
Katsumi Hanaue



▶ 第2版 ◀

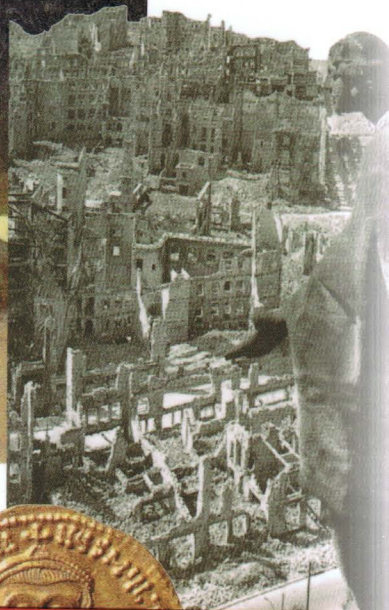
# ヨーロッパの歴史

## 欧州共通教科書

フレデリック・ドルーシュ 総合編集

木村尚三郎 監修

花上克己 訳



### ヨーロッパの 未来像を探る

14名の歴史家が、1996年までのヨーロッパの歩みを詳述。  
世界の28か国語に翻訳された旧版に、新たな章（1986-96年）を加え、  
現代以前の章にも記述改訂・写真変更を施した、待望の増補改訂第2版。



教育と文化を通じて人づくり  
創立90年 東京書籍

## ① フランス・レジスタンスへの 「6月18日に呼びかけ」

《こちらはド・ゴール將軍、今ロンドンから放送している。私は、武器の有無を問わず、イギリス領にいる、もしくはこれからやって来るであろうフランスの将校兵士諸君に訴える。私は、イギリス領にいる、もしくはこれからやって来るであろう軍需産業の技術者と専門労働者諸君に訴える。私に連絡をとって、くれ。何が起ころうと、フランス人の抵抗の炎は消してはならないし、今後とも消えることは決してないだろう。》



## ② スターリングラードの戦い

1941年6月22日、ドイツ兵300万人、飛行機5000機、戦車3500両がロシアに侵攻した。攻撃は電撃的だったが、気象条件が災いした。ドイツ国防軍は冬仕度をしていなかったため、雪の中で立ち往生した。電撃戦はもはや不可能になった。1942年夏、ヒトラーはスターリングラードへの進撃を命じた。この都市を陥落させることは、象徴的意義を担うものと考えたのである。しかし、スターリングラードは落ちなかった。ロシア人は壁から壁へ地下室から地下室へと身を隠しながら奮戦した。都市は9割方破壊され、常軌を逸した争奪戦の対象になった。足踏み状態のまま、包囲されたドイツ軍(20万人)は全滅に瀕した。1943年1月30日から2月2日の間に、スターリングラードで、勝利の日はドイツ軍からソ連軍へ移った。

## ドイツ軍のソ連侵攻

1941年6月22日、ヒトラーは宣戦布告することなく、ソ連邦に対して攻撃を開始した。イギリス人の執拗な抵抗にあつて、ヒトラーは西側において決定的な勝利を取めることができず、いらだちを募らせていたのである。ヒトラーが独ソ不可侵条約を破棄したのは、何よりも次の理由による。彼は、もともと共産主義を打ち倒すべき敵だと考えていたし、ドイツにとって不可欠であるといっていた「生活圏」を、東ヨーロッパから手に入れるつもりでいたからである。ドイツ軍はソ連に向かって迅速に進攻した。しかし、フランス、ポーランド戦に匹敵するような「電撃戦」を遂行することはできなかった。1941年から1942年の冬にかけて、ドイツ軍部隊は、モスクワとレニングラード(現在のサンクトペテルブルク)を目前にして進撃を阻止されてしまう。スターリンは「大祖国防衛戦争」を宣言し、国民の抵抗の意思を奮い立たせることに成功した。

わずかな中立国(ポルトガル、スペイン、アイルランド、スウェーデン、スイス)を除けば、全ヨーロッパの国々が、この戦争に巻き込まれていた。1942年の秋に、ドイツ軍部隊はヴォルガ川に達し、スターリングラード(現在のヴォルゴグラード)を陥落させるまでに迫った。しかし、ここから赤軍が猛反撃し、ドイツ軍は1943年2月に降伏のやむなきに至る。このドイツ軍の最初の大敗北が、戦争の転回点を画した。だが、戦いは、ヒトラーとナチス党の頑迷さのせいで、このあとさらに2年間続くことになる。ドイツ第三帝国の国民の間では、勝者としての士気を維持しようとして、至るところで宣伝活動が繰り広げられていた。大多数の国民もまた、疑念は増しつつあったが、相変わらず自国の軍事的優位を確信していたのである。

スターリングラードのドイツ軍敗北の時点ですでに、ヨーロッパの戦争は世界戦争になっていた。太平洋の中に帝国を建設しようとしていた日本の動きが、アメリカの参戦を招き、アメリカは日本とヒトラーのヨーロッパの両方を相手に戦っていた。アメリカ軍は最初の1年間、ハワイ

の真珠湾攻撃(1941年12月7日)にみられるような日本軍の奇襲攻撃の前に劣勢を強いられたが、その後、日米間の圧倒的な物量の差が次第に明らかになっていった。

第2次世界大戦は多くの面で、つまり、自動兵器や火器の性能面で、前の大戦よりも明らかにエスカレートしていた。よりスピードのある戦車が、より大量に用いられた。航空機の優位性は、勝利にとって不可欠の要素であった。海上では、連合国の輸送船団が大西洋の戦いにおいて、ドイツの潜水艦隊に手痛い打撃を被っていた。そして初めて戦闘が、前線以外の場所でも展開されたのである。市民も同様に傷ついていた。爆撃機編隊が都市をそっくり廃墟にし、(鉄道や道路などの)交通路を破壊した。合衆国では、想像を絶する破壊力を秘めた爆弾の開発が進められていた。この爆弾は当初、ドイツに対して用いられる予定であった。が、ヨーロッパの戦争が終わったとき、まだ完成されていなかった。その結果、1945年8月、最初の原子爆弾が広島、長崎に投下されたのである。

軍需品(兵器、爆薬、車両、軍服)についていえば、その需要があまりに膨大であったため、経済全体をすべて戦争へ振り向けなければならなかった。それゆえ、原料の獲得は、交戦中の国々にとって死活問題だったのである。その依存を少しでも軽減するために、代替品を探す努力が続けられた。例えば、ドイツでは、石炭からガソリンがつけられていた。

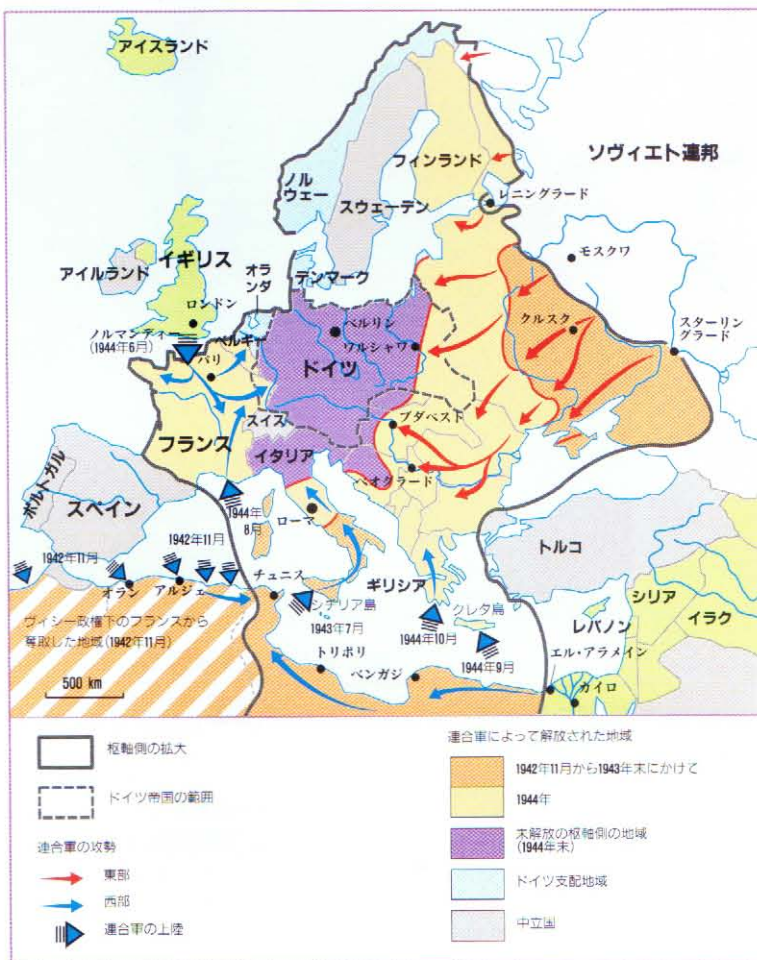
第1次世界大戦を生き長らえたヨーロッパの古い社会秩序の遺物は、ほとんど完全に一掃されていた。数百万人の人々が無理やり国外へ追放され、あるいは、迫りくる敵部隊を前にして逃亡していた。そして女性もいまだ一度、召集された男性に代わって、その仕事を引き受け、責任を果たさなければならなかった。戦後、盛んになる女権拡張運動(フェミニズム)は、この外から強制された自立の中にそのルーツを見いだすことができる。

## 犯罪

ドイツ軍によって占領された国々の国民は、虐げられ、搾取された。数百万の人々が、ドイツの戦争経済のために働かなければならなかった。抵抗はことごとく暴力的に抑え込まれ、ほんの少しでも疑いを持たれることは、そのまま死を意味していた。人質の処刑は組織的に行われた。なかでも、ドイツ軍の占領が苛酷をきわめたのは、東ヨーロッパにおいてであった。この地方の住民は単に、ドイツ軍の覇権に屈従を強いられただけではすまず、ロシア共産主義が、その地から根絶される必要があったからである。「劣等民族としてのスラヴ人」は、ドイツ人の奴隷にならなければならなかったのである。

戦争中に、ヒトラーとその取り巻きの狂信的な人種差別主義者たちは、「ユダヤ人問題の最終的解決」を実行に移す決意をした。1933年以降、ユダヤ人は次々にその権利を剝奪され、屈辱をなめさせられた。このため、手遅れにならないうちに、多くのユダヤ人がドイツを去っていった。次いで、被占領国のユダヤ人が、死に直面した。東欧では、特別行動隊(アインザッツコマンドス)が、ユダヤ

## ③ 連合軍の上陸



## ④ ユーゴスラビアのレジスタンス弾圧

ユーゴスラビア軍は1941年ドイツ軍に打ち負かされた。国民の一部は激しく抵抗し、投獄や強制収容所への収容、略式処刑の犠牲になった。しかし、クロアチアはアンテ・パヴレヴィチ率いるファシスト的な「ウスタシャ」運動の指導の下で、第三帝国に協力するようになった。



## ① アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所に到着した人々の選別

現代ユダヤ人資料センター記録保管所

ユダヤ人移送者は収容所に着くと、二つのグループに分けられた。ナチスが健康であると判定した人々は収容され、強制労働に従事することになるが、おもに老人や女性、子供からなるグループはガス室に送られ、そこで殺された。アウシュヴィッツ(現在のオシビエンチム)は、トレ布林カと同じく絶滅収容所であった。

## ② アウシュヴィッツ強制収容所所長のユダヤ人虐殺についての証言

ルドルフ・ヘスはアウシュヴィッツ収容所所長だった。1947年、彼はポーランドで死刑を宣告され、すぐに絞首刑に処せられた。拘留中に、ヘスは自伝的ノートを残し、その中で、ガス室を用いてナチスが遂行した民族抹殺(ジェノサイド)を描いている。ヘスは、決して疑問を抱かず、いかなる体制であれ、喜んでそれに従うようなタイプの人間だった。純粹に記録スタイルで技術を論じたその文章は、憎悪であれ憐憫であれ、自分が死に追いやった人々に対する感情が完全に欠落している。それだけになおさら鬼気せまる文章である。

《脱衣後、ユダヤ人はガス室へ入った。ガス室には、シャワーと水道管が備えられ、いかにも浴室らしく見せかけられている。最初に女たちがその子供たちとともに入り、その後男が続くが、いつも数は少ない。(略)

入り終わると急いで扉が施錠され、合図を受けた「消毒係」の看護人は、すぐに天窓からガスを入れた。ガスの詰まった缶がいくつも投げ込まれ、ガスはすぐに室内に充満した。(略)

ガスを投入してから30分後、扉を開け、換気装置を作動させると、ただちに死体の搬出が行われる。(略)

特別班がすぐに死体から金歯を引き抜き、女の毛髪を刈り取り始めた。次いで、死体はエレベーターで1階へ運ばれた。1階では、すでに焼却炉が点火されている。死体のサイズにもよるが、一つの炉に3体まで入れることができた。焼却時間もまた、死体のサイズによって決まってくる。》

ルドルフ・ヘス「アウシュヴィッツ収容所所長の証言」ジュリアル社刊(1959)

人を組織的に殺戮し、1941年9月29日と30日の2日間に、キエフ近郊で、3万3771人のユダヤ人が射殺された。しかし、こうした方法は時間と手間がかかる。そこでナチスは、最小限の努力でできるだけ速くできるだけ多く殺害する手段を探した。毒ガス「チクロンB」が、この仕事に最も効果的であることが判明し、多くの強制収容所(アウシュヴィッツ、ベルゼック、ヘルムノ、マイダネック、ソビボル、トレ布林カ)のガス室で用いられた。ユダヤ人や、ロマ(ジプシー)のようなそれ以外の「劣等人種」を捕らえるため、ナチスの死刑執行人は、しばしば現地当局の協力を得て占領国内を徹底的に搜索した。しかし、各地で、強制連行に対する抵抗が現れた。ワルシャワ・ゲットーのユダヤ人蜂起(1943年)は、犠牲者たちがナチスの殺人装置と闘わずに降伏したわけではないことを示す証拠である。

人種的理由により殺害された人間の正確な数は、今日に至るまで依然として不明であるが、500万から600万人と推定されている。現代技術の手段を用いて、一民族を根絶しようとした試みは、歴史上他に例がない。それはまさしく人類に対する犯罪であった!

## 対独協力とレジスタンス

被占領国住民の人心を掌握する努力を続けながら、ナチスの教化活動をソ連を口をきわめて非難していた。こうした非難や中傷は、ポリシェヴィキの残忍さからヨーロッパ文化を守るためであるかのように伝えられた。ベルギー、デンマーク、フランス、およびその他の諸国からやって来た志願兵は、ドイツ軍の兵士とともに戦闘に参加した。かなり多くの数の人々や諸政府、特にベタン元帥のフランスは、ドイツの勝利を願い、占領軍に協力しようとしていた。とはいえ、大部分の国民はいかなる危険も冒さず、じっと嵐が過ぎ去るのを待った。が、戦争が長びくにつれ、各国でレジスタンス(抵抗運動)が組織されるようになった。これらの非合法活動(しばしば、互いに政治的に対立していた)は、ストライキ、妨害活動、テロ、スパイ工作など、占領軍に打撃を与えようとする活動を利用した。

フランスのド・ゴール將軍は1940年の夏から、ロンドンからフランス抗独運動の指揮をとっていた。一方、東ヨーロッパやギリシア、ユーゴスラヴィアでは、パルチザン(ゲリラ)が、ドイツ軍を相手に熾烈な戦いを繰り広げていた。そしてドイツ本国においても、多くの人が、ドイツの名において犯された犯罪に気づいていた。ドイツ国民のあらゆる層からの出身者である男女が、ナチスの狂気に対して何か抵抗を試みようとして決意していた。だが、全体主義体制下では、こうした行為は非常に困難で、何よりも危険きわまりないことであった。1944年7月、ドイツ国防軍の将校たちによるヒトラー暗殺計画は、ぎりぎりのところで失敗する。他方、あらゆるレジスタンス活動